

令和6年度 第5回広島市感染症対策協議会

【日 時】 令和6年11月18日（月）19:00～20:00

【場 所】 広島市役所 14 階第7会議室

【出席者】 小林 正夫、坂口 剛正、石川 暢久、吉岡 宏治、高橋 宏明、佐藤 貴、
金子 朋子、大橋 信之、増田 裕久、梶梅 輝之、長岡 義晴、岡野 里香、阿部 勝彦

1 感染症に関する最近の情報

(1) 国内における麻しんの発生状況について（資料1 P 1 ～ 27）

第38週（9月16日～22日）から第44週（10月28日～11月3日）にかけて、海外渡航歴が確認されていない国内症例や当該患者からの二次感染が疑われる事例等、関東を中心に麻しん患者の発生が相次いで報告されており、2024年は第44週までに累計39件の報告があった。

麻しんの感染力は非常に強く、飛沫感染、接触感染だけでなく、空気感染でも感染するため、広域的に患者が発生するおそれがある。

患者の発生報告を受け、各自治体は、麻しん患者が不特定多数の人と接触した可能性が否定できないとし、報道発表資料等を活用し広く情報の発信を行っている。特にワクチン未接種の人は、麻しん患者と接触した可能性のある日から21日以内に、発熱、発疹等、麻しんを疑う症状が現れた場合、速やかに医療機関を受診するよう呼び掛けており、受診する際には、医療機関への事前連絡、マスク着用の徹底、公共交通機関の利用を避けること等について注意喚起をしている。

本市としては、引き続き今後の発生動向について注視していくこととする。

（委員意見）

- ・ 今後の発生動向について注視していく必要がある。

(2) インフルエンザの発生状況について（資料1 P 28 ～ 67）

令和6年11月11日、国は、今シーズンのインフルエンザの流行に備え、「令和6年度今シーズンのインフルエンザ総合対策」を取りまとめた。

本市においては、第45週（11月4日～10日）の感染症発生動向調査における定点当たりのインフルエンザ患者報告数は0.78人と流行入りの基準である1人を下回っているが、市内学校におけるインフルエンザ様疾患による学級閉鎖等について、9月30日に今シーズン初めての報告があり、その後も断続的に報告が続いていることから、今後の発生動向に注視する必要がある。

今冬の本格的な流行シーズンに備え、ホームページ等を通じて65歳以上を対象としたインフルエンザの定期接種について周知を図っていくとともに、市民に対して手洗いや咳エチケットの励行など、感染予防対策を徹底するよう呼びかけていく。

（委員意見）

- ・ 今シーズンから開始された小児向け経鼻ワクチンの副反応や接種状況について、今後注視していく必要がある。

(3) マイコプラズマ肺炎増加に関する学会からの提言について（資料１ P 68 ～ 77）

令和6年10月24日、国は、日本呼吸器学会、日本感染症学会、日本化学療法学会、日本環境感染学会、日本マイコプラズマ学会の5学会より「マイコプラズマ感染症（マイコプラズマ肺炎）急増にあたり、その対策について」の提言が出されたこと受け、各都道府県及び保健所設置市等に対し、事務連絡を発出した。

この提言では、マイコプラズマ肺炎に関する一般の方及び患者向けへの啓発・説明並びに医療者向けの留意点が示されており、家族内感染事例が多く発生していることやマクロライド耐性株がアジアを中心に急速に拡大していることなどが述べられている。

また、本疾患は2020年から2023年を除く過去10年、秋から冬にかけて比較的大きな流行が認めていたが、本年の患者報告数は、第23週（6月5日～11日）あたりから急激に増加しており、過去10年間の流行時期とは明らかに異なり、夏に急増していることが特徴であるとされている。

本市においては、市民に対し、ホームページやSNS等を活用し、手洗い励行、マスクの着用などの感染予防対策の周知を図っているところである。

（委員意見）

- ・ 小児のうち、就学前から学童にかけての年代において、肺炎症状等により入院する例が多い。

(4) 百日咳の発生状況について（資料１ P 78 ～ 80）

百日咳の患者報告数は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行が始まった2020年以降、低い水準が続いていたが、今年の全国における患者報告数は、春から増加傾向を示している。本市においても8月頃から報告が続いており、2024年は第45週（11月4日～10日）までに累計26件の報告があり、過去5年では2020年に次ぐ患者報告数となっている。

百日咳は、7～10日程度の潜伏期間を経て、かぜ様症状で始まり、次第に咳の回数が増えて程度も激しくなる。その後、短い咳が連続的に起こり、息を吸う時に笛のような音が出る発作性の咳となり、しばしば嘔吐を伴う。また、肺炎や脳症などを合併することもあり、1歳以下の乳児、特に生後6か月未満の乳児は重症化のリスクが高いとされている。

ワクチンの免疫効果は、4～12年で減弱し、最終接種後時間経過とともに感染することがあり、成人の場合は、咳が長期にわたって持続するが、典型的な症状を示すことが少ないことから、受診・診断が遅れ、周囲に感染を拡げてしまう可能性がある。

主な感染経路は、飛沫感染と接触感染であり、家族内感染が疑われる事例も散見していることから、咳症状のある人は、マスクを着用するなどの感染予防対策を講じるとともに、症状が続く場合は、早期に医療機関を受診することが重要である。

（委員意見）

- ・ ワクチンの免疫効果が長期間持続しない可能性があるため、今後の感染拡大に注意する必要がある。

2 10月の定点把握対象感染症発生状況《公開》（資料２、３）

※感染症法に定められた感染症のうち、指定された医療機関のみが報告を行う感染症

3 全数把握対象感染症の発生状況《公開》

区分	病 名	令和6年10月分	令和6年11月分
		報告日 10/7～11/3	報告日 11/4～11/13 現在
2類	結核	8人 (結核 5人, 潜在性結核 3人)	0人
3類	腸管出血性大腸菌感染症	1人(11/2)	
4類	重症熱性血小板減少症候群	2人(1人(10/11), 1人(10/23))	
	つつが虫病		2人(1人(11/5), 1人(11/8))
	日本紅斑熱	1人(10/29)	
	レジオネラ症	3人(1人(10/18), 1人(10/24)), 1人(10/29))	1人(11/7)
5類	アメーバ赤痢		1人(11/6)
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2人(1人(10/17), 1人(11/1))	1人(11/5)
	急性弛緩性麻痺（急性灰白髄炎を除く。）	1人(10/9)	
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1人(10/26)	
	後天性免疫不全症候群	2人(1人(10/10), 1人(10/22))	
	侵襲性インフルエンザ菌感染症		2人(1人(11/7), 1人(11/8))
	侵襲性肺炎球菌	1人(10/30)	
	水痘（入院例に限る。）	1人(10/31)	
	梅毒	12人(1人(10/7), 1人(10/8), 3人(10/11), 1人(10/12), 1人(10/17), 1人(10/19), 1人(10/22), 1人(10/23), 1人(10/28), 1人(10/29))	7人(1人(11/5), 2人(11/7), 1人(11/8), 1人(11/12), 2人(11/13))
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1人(10/30)	
	百日咳	8人(2人(10/21), 2人(10/24), 1人(10/25), 3人(10/28))	2人(11/7)

() は届出日

4 その他《公開》

次回開催予定日 令和7年1月20日(月) 14階第7会議室

【資料】

資料1：最近の感染症情報

資料2：10月の感染症の概要

資料3：定点把握五類感染症（月報対象）の長期的変動

1 患者情報

(1) 概要

定点からの内科・小児科・眼科系疾患の患者報告数は、10月は1,098人で、前月比0.94とほぼ横ばいであった。

インフルエンザは大きく増加、咽頭結膜熱、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、感染性胃腸炎はやや増加、マイコプラズマ肺炎はほぼ横ばい、突発性発しん、流行性角結膜炎はやや減少、手足口病は減少、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)、ヘルパンギーナは大きく減少した。

(2) 特記事項

- マイコプラズマ肺炎は、多い状況が続いており、第45週（11月4日～10日）に定点当たり8.33人の報告があった（図1）。全国では増加傾向が続いており、注意が必要である。手洗いの励行、咳エチケットなど、感染予防対策が重要である。
- インフルエンザは、第45週に定点当たり0.78人の報告があった。全国では第44週（10月28日～11月3日）に定点当たり1.04人と流行開始の目安である定点当たり1.00人を上回り、流行期に入った（図2）。今後、本格的な流行を迎えることが予想されるため、手洗い、咳エチケット、換気などの対策を徹底することが重要である。なお、協力医療機関（市内2か所）による今シーズンの迅速診断キット検査結果では、累計31人（A型31人、B型0人）が報告されている。また、衛生研究所による遺伝子検査では、今シーズンは、インフルエンザウイルスA（H1N1）2009型が3件検出されている（第45週現在速報値）。

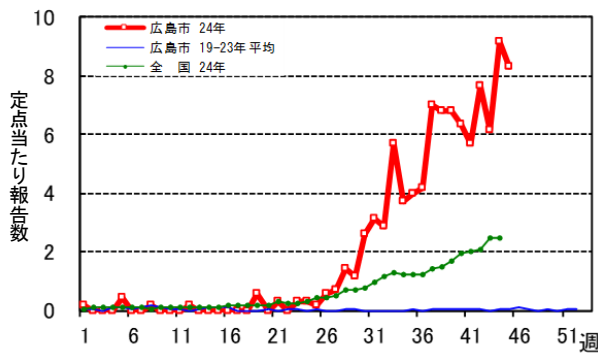


図1 マイコプラズマ肺炎の流行状況

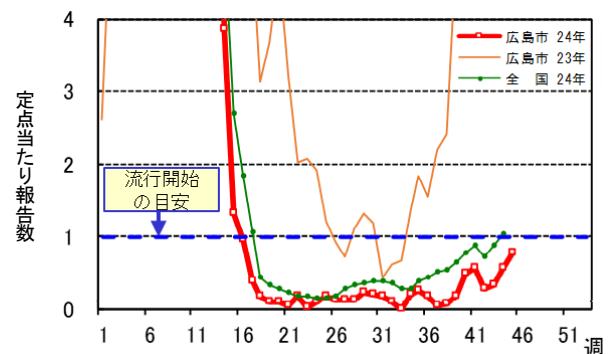


図2 インフルエンザの流行状況

- 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、減少速度が鈍化しており、第45週に定点当たり0.67人の報告があった。引き続き、基本的な感染予防対策を続けることが大切である。
- 百日咳は、8月以降報告数が増加しており、11月10日時点で今年の累計報告数は29件となった。
- 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の今年の累計報告数は、11月10日時点で2件となった。また、日本紅斑熱は第44週に、つつが虫病は第45週に今年初めての報告があった。感染を予防するためには、山や草むらに入るときは、長袖、長ズボンを着用するなど肌の露出を避け、ダニ類に刺されないようにすることが重要である。

(3) 10月の1類～5類感染症（全数報告）患者発生数

- 1類感染症：なし
- 2類感染症：結核8件（患者：5件、潜在性結核：3件）
- 3類感染症：腸管出血性大腸菌感染症 1件
- 4類感染症：重症熱性血小板減少症候群 2件、日本紅斑熱 1件、レジオネラ症 3件
- 5類感染症：カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症 2件、急性弛緩性麻痺 1件、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 1件、後天性免疫不全症候群 2件、侵襲性肺炎球菌感染症 1件、梅毒 14件、バンコマイシン耐性腸球菌感染症 1件、百日咳 11件

(4) 今後の流行予測

インフルエンザ・・・【流行始まり】、マイコプラズマ肺炎・・・【流行中】
 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)・・・発生動向に注意が必要である。
 百日咳・・・【増加傾向】発生動向に注意が必要である。

2 検査情報

10月の検査結果判明分

臨床診断名	検出病原体	検体採取年月	患者数
インフルエンザ	インフルエンザウイルス A (H1N1) 2009 型	2024 年 10 月	1 人
手足口病	単純ヘルペスウイルス 1 型	2024 年 8 月	1 人
その他の循環器疾患(心筋炎)	エコーウイルス 3 型	2024 年 8 月	1 人
その他の疾患(不明熱)	コクサッキーウイルス A16 型	2024 年 8 月	1 人

4 人の患者から 4 種類のウイルス 4 株が検出された。検出ウイルスの内訳は、インフルエンザウイルス A (H1N1) 2009 型、単純ヘルペスウイルス 1 型、エコーウイルス 3 型、コクサッキーウイルス A16 型各 1 株であった。

3 感染症法 5 類全数把握薬剤耐性菌感染症患者からの分離菌株解析結果 (2024. 7~10 月分)

(1) カルバペネム耐性腸内細菌目細菌 (CRE) 感染症

届出年月	年齢	区	症状	分離検体	菌 種	カルバペネマーゼ 遺伝子※1
2024 年 6 月※2	85	佐伯	尿路感染症	尿	<i>Escherichia coli</i>	<i>bla</i> _{IMP-6}
2024 年 7 月	78	西	尿路感染症	尿	<i>Enterobacter cloacae</i>	<i>bla</i> _{IMP-6}
2024 年 8 月※2	85	佐伯	肺炎	喀痰	<i>Escherichia coli</i>	<i>bla</i> _{IMP-6}
2024 年 10 月	59	南	菌血症、敗血症	血液	<i>Klebsiella pneumoniae</i>	検出せず

※1 検査対象カルバペネマーゼ遺伝子型：KPC, IMP, NDM, VIM, OXA-48, GES, KHM, SMB, IMI

※2 同一患者

6 月、7 月、8 月及び 10 月に各 1 件の届出があった。分離菌株は *bla*_{IMP-6} を保有する *Escherichia coli* が 2 株（同一患者からの分離）、*bla*_{IMP-6} を保有する *Enterobacter cloacae* 及びカルバペネマーゼ遺伝子不検出の *Klebsiella pneumoniae* が各 1 株であった。

(2) バンコマイシン耐性腸球菌 (VRE) 感染症

届出年月	年齢	区	症状	分離検体	菌 種	耐性遺伝子
2024 年 7 月	86	中	発熱	血液	<i>Enterococcus avium</i>	<i>vanA</i>
				尿	<i>Enterococcus gallinarum</i>	<i>vanA</i> , <i>vanCI</i>
2024 年 10 月	71	南	菌血症	血液	<i>Enterococcus faecium</i>	<i>vanA</i>

7 月及び 10 月に各 1 件の届出があった。7 月届出分の患者からは複数株が分離されており、*vanA* 遺伝子を保有する *Enterococcus avium* 並びに *vanA* 及び *vanCI* 遺伝子を保有する *Enterococcus gallinarum* 各 1 株であった。また 10 月届出分の分離菌株は、*vanA* 遺伝子を保有する *Enterococcus faecium* であった。

5類感染症定点情報
(令和6年10月解析分)

1. 週報対象(第41週～第44週)

No.	疾患名	発生記号	報告数	定点当たり	今後の予測	No.	疾患名	発生記号	報告数	定点当たり	今後の予測
1	インフルエンザ		64	1.77		11	ヘルパンギーナ		4	0.16	
2	新型コロナウイルス感染症(COVID-19)		117	3.25		12	流行性耳下腺炎		1	0.04	
3	RSウイルス感染症		19	0.82		13	急性出血性結膜炎		-	-	
4	咽頭結膜熱		20	0.87		14	流行性角結膜炎		22	2.76	
5	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		189	8.21		15	細菌性髄膜炎		-	-	
6	感染性胃腸炎		303	13.18		16	無菌性髄膜炎		-	-	
7	水痘		15	0.65		17	マイコプラズマ肺炎		172	28.68	
8	手足口病		130	5.65		18	クラミジア肺炎		-	-	
9	伝染性紅斑		4	0.18		19	感染性胃腸炎(ロタウイルス)		1	0.17	
10	突発性発しん		16	0.69							

2. 月報対象(10月)

No.	疾患名	発生記号	報告数	定点当たり
1	性器クラミジア感染症		31	3.44
2	性器ヘルペスウイルス感染症		11	1.22
3	尖圭コンジローマ		11	1.22
4	淋菌感染症		10	1.11
5	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症		21	3.50
6	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症		-	-
7	薬剤耐性緑膿菌感染症		-	-

発生記号

前月と比較しておおむね1:2以上の増減		
前月と比較しておおむね1:1.5～2の増減		
前月と比較しておおむね1:1.1～1.5の増減		
ほぼ横ばい(発生件数少数のものを含む)		

予測記号

流行始まり	
流行中	
流行終息傾向	
終息	

全数把握感染症報告数(令和6年10月分)

第41週～第44週(10月7日～11月3日)報告分

類型	疾患名	広島市		全 国	
		報告数	累積	報告数	累積
一類	1 エボラ出血熱	-	-	-	-
	2 クリミア・コンゴ出血熱	-	-	-	-
	3 痘そう	-	-	-	-
	4 南米出血熱	-	-	-	-
	5 ベスト	-	-	-	-
	6 マールブルグ病	-	-	-	-
	7 ラッサ熱	-	-	-	-
二類	8 急性灰白髄炎	-	-	-	-
	9 結核	8	89	1,517	13,283
	10 ジフテリア	-	-	-	-
	11 重症急性呼吸器症候群	-	-	-	-
	12 中東呼吸器症候群	-	-	-	-
	13 鳥インフルエンザ(H5N1)	-	-	-	-
	14 鳥インフルエンザ(H7N9)	-	-	-	-
三類	15 コレラ	-	-	-	2
	16 細菌性赤痢	-	-	6	70
	17 腸管出血性大腸菌感染症	1	26	425	3,284
	18 腸チフス	-	-	2	34
	19 パラチフス	-	-	-	5
四類	20 E型肝炎	-	2	42	447
	21 ウエストナイル熱	-	-	-	-
	22 A型肝炎	-	3	6	124
	23 エキノコックス症	-	-	1	12
	24 黄熱	-	-	-	-
	25 オウム病	-	-	1	4
	26 オムスク出血熱	-	-	-	-
	27 回歸熱	-	-	-	10
	28 キャサヌル森林病	-	-	-	-
	29 Q熱	-	-	-	6
	30 狂犬病	-	-	-	-
	31 コクシジオイデス症	-	-	1	3
	32 エムボックス	-	-	2	18
	33 ジカウイルス感染症	-	-	1	4
	34 重症熱性血小板減少症候群	2	2	14	111
	35 腎症候性出血熱	-	-	-	-
	36 西部ウマ脳炎	-	-	-	-
	37 ダニ媒介脳炎	-	-	-	2
	38 炭疽	-	-	-	-
	39 チクングニア熱	-	-	3	6
	40 つつが虫病	-	-	13	126
	41 デング熱	-	2	9	200
	42 東部ウマ脳炎	-	-	-	-
	43 鳥インフルエンザ(H5N1及びH7N9を除く。)	-	-	-	-
	44 ニバウイルス感染症	-	-	-	-
	45 日本紅斑熱	1	1	111	453
	46 日本脳炎	-	-	-	6
	47 ハンタウイルス肺症候群	-	-	-	-
	48 Bウイルス病	-	-	-	-
	49 鼻疽	-	-	-	-
	50 ブルセラ症	-	-	-	4
	51 ペネズエラウマ脳炎	-	-	-	-
	52 ヘンドラウイルス感染症	-	-	-	-
	53 発しんチフス	-	-	-	-
	54 ボツリヌス症	-	-	1	5
	55 マラリア	-	-	1	43
	56 野兎病	-	-	-	-
	57 ライム病	-	-	2	25
	58 リッサウイルス感染症	-	-	-	-
	59 リフトバレー熱	-	-	-	-
	60 類鼻疽	-	-	-	2
	61 レジオネラ症	3	20	271	2,024
	62 レプトスピラ症	-	-	10	44
	63 ロッキー山紅斑熱	-	-	-	-
五類	64 アメーバ赤痢	-	2	33	437
	65 ウイルス性肝炎	-	1	15	188
	66 カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	2	7	206	1,861
	67 急性弛緩性麻痺(急性灰白髄炎を除く。)	1	2	5	39
	68 急性脳炎	-	7	44	453
	69 クリプトスポリジウム症	-	-	2	24
	70 クロイツフェルト・ヤコブ病	-	2	20	141
	71 劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1	18	112	1,669
	72 後天性免疫不全症候群	2	7	85	844
	73 ジアルジア症	-	2	4	34
	74 侵襲性インフルエンザ菌感染症	-	2	35	519
	75 侵襲性髄膜炎菌感染症	-	-	7	52
	76 侵襲性肺炎球菌感染症	1	9	132	1,984
	77 水痘(入院例に限る。)	-	1	36	403
	78 先天性風しん症候群	-	-	-	-
	79 梅毒	14	142	1,165	12,293
	80 播種性クリプトコックス症	-	1	14	166
	81 破傷風	-	-	7	73
	82 バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症	-	-	-	-
	83 バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1	7	12	106
	84 百日咳	11	27	670	2,658
	85 風しん	-	-	-	5
	86 麻しん	-	-	8	39
	87 薬剤耐性アシネトバクター感染症	-	-	-	5